

閉経後に飲酒量が増えると乳がんリスクは上昇、 冠動脈性心疾患リスクは低下する

閉経後 5 年間で飲酒量が増加した女性では、変化のない女性と比べ、乳がんリスクが上昇し冠動脈性心疾患リスクが低下するかを検証した。

1993～1998 年と 1999～2003 年に実施された、デンマークの 2 つの連続した試験に参加した閉経後女性 21,523 例を対象に、前向きコホート試験を実施した。11 年の追跡期間中、乳がんは 1,054 例、冠動脈性心疾患は 1,750 例発症し、死亡は 2,080 例であった。

5 年間のアルコール摂取量の変化について分析した結果、5 年間にアルコール摂取量が増えた女性は、摂取量が一定であった女性より乳がんリスクは高く、冠動脈性心疾患リスクは低いことが示された。例えば、アルコール摂取量が週に 7 杯または 14 杯（1 日 1 杯または 2 杯に相当）増加した女性では、一定量であった女性と比べ、乳がんのハザード比（年齢・教育・BMI、喫煙、地中海式ダイエットのスコア、出産歴の有無、出生児数、ホルモン補充療法の調整後）はそれぞれ 1.13、1.29 であった。冠動脈性心疾患における同ハザード比（年齢、教育、BMI、地中海式ダイエットのスコア、喫煙、身体活動、高血圧、高コレステロール、糖尿病の調整後）はそれぞれ 0.89、0.78 であった。

5 年間でアルコール摂取量が減少した女性では、乳がんや冠動脈性心疾患のリスクとの有意な関連はみられなかった。また、アルコール摂取量が「高摂取量」（週 14 杯以上）からさらに増えた女性は、「高摂取量」で一定していた女性よりも死亡リスクが高かった。

したがって、閉経後 5 年間で飲酒量が増えた女性は、変化のない女性と比べ、乳がんリスクは上昇し、冠動脈性心疾患リスクは低下することが示された。

出典：British Medical Journal(Clinical research ed.). 2016; 353: i2314